

特定非営利活動法人 太平洋戦史館

戦史館だより

2023年2月5日発行
 戦史館事務局〒029-4427
 岩手県奥州市衣川陣場下
 41番地 蠶オフィス花岡
 編集発行人 花岡千賀子

会長理事 岩渕 宣輝 事務局長 花岡千加子 ☎0197-52-3000 FAX 0197-52-4575

2023年、物価の急騰と猛烈な寒波がこれでもか…これでもか…と攻めてくる日々が続きますが、戦史館会員の皆様、無事にお過ごしでしょうか？

ロシアによるウクライナ侵攻から1年。コロナ禍3年。インドネシア方面の遺骨帰還事業が中断されて8年。東日本大震災から12年。そして戦後78年です。これからも戦後〇〇年と数えて戦後の記録を延ばしたいところですが、すでに戦前かもしれない。戦争が始まったその日に、昨日までが戦前だったと気づくのです。戦後79年80年…と戦後の記録を延ばしたいという願いは、戦争で肉親を亡くした者に切実ですよね。 昨年12月16日の

『敵基地攻撃』の閣議決定…衝撃でしたね。

二度と戦争をしない平和な国をつくろう…そのために日本国憲法があったはずなのに、岸田政権は「専守防衛」を投げ捨て、とうとう日本を戦争ができる国にしてしまいました。政府は「敵基地を攻撃する能力を持てば相手に攻撃を思いとどまらせる抑止力になるので日本はより安全になる」と説明していますが、本当にその言葉を信じる人がいるのでしょうか？ 少なくとも近隣の国々は警戒するでしょう。

政府は日本が戦争ができる国になるようにコツコツ準備してきたんですね。2014年7月に『集団的自衛権』を閣議決定したときが戦争への道の曲がり角でした。当時の安倍総理は「日本人母子を乗せた米軍艦船を自衛隊が護衛する！？」と意味不明！あり得ない事例をあげて国民を煙に巻きました。翌2015年には“戦争ができるための法律”11本がするっと国会を通過。『敵基地攻撃』では日本が直接攻撃されていなくても、米国が始めた戦争の相手国を攻撃できるということになるので、逆に日本が攻撃される可能性も増します。

『敵基地攻撃』をするためには、これまでの防衛装備では“古いし不十分”なので、攻撃用の米国製の武器をどっさり買うことを既に約束しています。“防衛費という名の軍事費”は5年後には2倍に。その金額は世界各国の軍事費の4番に相当。政府は軍事大国には当たらないと言っていますが、これを軍事大国と言わず、何と云えばいいのでしょうか？

“防衛費という名の軍事費”を増やせばもう後戻りできません。国民の生活を犠牲にして福祉や医療、教育を切り捨てて大増税。その財源をうやむやにして先延ばしするのは、日本の国力をはるかに超えているからでしょうか？ かつて経済大国と言われた時代もありましたが、経済ではもはや外国に太刀打ちできない。代わりに軍事で勝負？？なんてことにならないように願いたい。

国民の意識調査では「防衛費を増やすべき」「敵基地攻撃能力も必要」と回答する人が増えているそうです。その理由として、ロシアのウクライナ侵攻や北朝鮮からのミサイルの恐怖、中国が台湾に侵攻するかもしれないという不安の高まりがあるのでしょうか。その気持ちは無理ないことだと思います。しかし、ドサクサに紛れて“防衛費という名の軍事費”で米国製の攻撃型武器を爆買いすることが本当の防衛なのでしょうか？米国と一緒に

次のページへ

にアクセルを踏み続けるのではなく、ブレーキをかける役割はできないのでしょうか？日本にしかできない外交があるはず。戦争になる道だけを示して国民をあおるような情報を矢継ぎ早に垂れ流しするのでなく、国民の声を“聴く耳を持って”国民に冷静になるよう呼びかけて、あらゆる分野に国際交流を働きかけて『避戦の技術力』で勝負してほしい。これが防衛力だと思うのですが、戦史館会員の皆さん　そう思いませんか？

私達一人ひとりも、戦争を避けるためのワザを磨きたい。戦史館だより3ページの上の枠外に毎号出しているスローガン「平和を願うなら避戦の行動を、プラスの国際交流を」あきらめずに磨き続けましょう。例えば憲法について。もしあなたのまわりに「憲法はアメリカが押しつけたもので、あんな理想主義は今の時代にそぐわない。憲法を変えるべきだ。自主憲法を！！」という人がいるならば、逆手にとってこう言うのはどうでしょう？「私達は“親愛なる”アメリカから戴いた憲法を愛しているので、これからも大切にします…憲法9条があるので戦争はできないんですよ！！」と。

次の世代に伝えたい『避戦のワザ』は？

後期高齢者が多数を占める戦史館、1941年生まれの岩渕宣輝も8月には満82才。それなりに思考も体力もガタが来ていますが、直近の目標は、2015年10月に中断されたままのインドネシア共和国パプア州スピオリ市からの遺骨帰還が再開されること。その根回し準備調整、現地との連絡など、できることを淡々と続けています。また若い世代に伝えようと岩手大学で毎年12月に講義していますが、そろそろ終活準備…今回で最後の講義になると念入りに準備しました。当日は大学生や高校生に交じり、地元在住の戦史館会員4名が応援に駆けつけて受講してくれました。

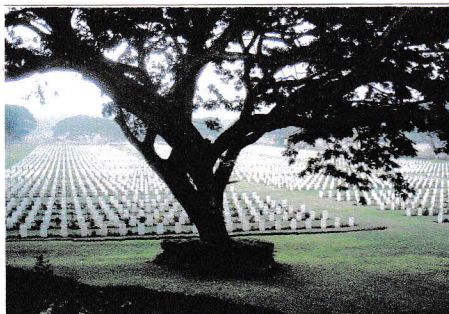
近年、若い人はコロナ禍で大変な状況に置かれているので戦争のことまで意識が向かないだろう…と思っていたのですが、後日　学生のレポートに目を通しているうちに、若い人が戦争をどのように受け止めたかを改めて知って「講義をやめるのをやめよう」と思い直し、次回もお引き受けすることにしました。ただ、何年も先のことはわからない。その回が最後になるかもしれないという緊張感を忘れずに、1回1回ていねいに。

講義では毎回、パプア州での遺骸搜索や遺骨帰還の写真を大型スクリーンに映して解説するのですが学生はその生々しい画像にショックを受け、辛くて目を背ける場面もあります。「戦争のことは見たくない聞きたくない」というのが本音だと思います。それでも「きちんと向き合わなければ何も解決しない」という気持ちでしょうか。最後まで付き合ってくれます。「昔の出来事として日本が戦争をしたと歴史の授業で学んでいるし戦争を忘れてはいけないと教わってきたが、今も戦死者の遺骸が取り残されていて戦争が終わっていないという事実には驚いた」と書いてきます。戦争の悲惨さは、漠然と理解していても、戦後78年経った今も、白骨になって異国の地に放置されているのは学生と同じ世代で命を断たれた若者たち。戦没者一人ひとりの無念さに思いを馳せるレポートも何通か読ませてもらいました。



“弔うということとは？” “死者の人権とは？”

写真左はポートモレスビーにある英連邦の戦没者墓地。海外ではその人が信仰する宗教でその地で個別埋葬されますが、日本ではどうでしょう。今も旧戦場に遺棄されたまま故国に帰れない。



写真右はビアク島の『戦没日本人之碑』。この場所は多数の日本兵の遺骸がみつかった場所で、火葬した跡地にそのまま碑が置かれていますが、今も冊の回りから遺骸が見つかることがあります。国家に命を奪われた兵士たちの弔い方のちがいに多くの学生が戸惑っていました。戦史館だよりでも講演でも「人は死んでも人であり人として弔われなければならない。その人の信じる宗教で」「戦争の犠牲者で一番弱い立場の戦没者こそ、生きている人間が守らなければ」と岩渕は度々語っているのですが、学生からの「死者に人権があるのでしょうか？守れるものなのでしょうか？」という質問に、何と回答すればいいのか、本当に人権を守ることができるのか、正直ワカラナイ。今 若い人に言えるのは、遺骨はモノではない、一人ひとりの生きた証であるという事実です。

学生のレポートから推察すると、歴史教育の現場では、二度と戦争を起こしてはならないという概論は学んでも、具体的な課題を取り上げること避ける風潮があるようです。また戦争の被害面は伝えられやすいが、加害…日本が中国や朝鮮半島の人々に犯した過去の過ちについて、若い人はこれまで具体的に知る機会が少なかったのでしょう。

ましてや戦後処理、遺骨帰還、危険物の撤去…当事国の責任など初めて聞く話ばかり。現在を生きる若者に当事者責任を負わせることはできませんが、次の戦争を避けるためにも、過去の戦争…いいえ過去ではなく今も終わっていないことを忘れずにいてほしい、一人ひとりの生と死について思いを馳せてほしいと願いました。

「一度戦争を初めてしまったら、戦後処理に百年かかる」という言葉は、ビアク島から生還した戦史館初代会長、佐々木市男さんが生前よく口にしていたことばですが、今を生きる若者はこの言葉を知って、戦争は今も続いているのだと実感したようです。

「逆さ地図」近隣諸国の目線で日本をみると

スクリーンに映す画像の最後は「逆さ地図」
正式名称は環日本海・東アジア諸国図。富山県が日本海側の都市と近隣諸国との交流を目指して作成した地図で、戦史館では富山県土木部の許可を得て掲載しています。見慣れた地図は北が上で日本を中心に配置していますが巨大な湖のように見える日本海をぐるっと囲んでロシア 北朝鮮 韓国 中国 台湾 向こう岸が日本。



ご近所の国々とのお付き合いが難しい時代だからこそ、互いを理解して交流してほしい。